青紙左衛門尉

巻一

No. 47

へ13
3145
1

曲亭主人評決　百案新增

青砥藤綱摸稜案前集

葛飾北齋出像

平林堂梓

昭和九年九月十一日購求

青砥藤綱摸稜案原序

眼底臭銅畢竟萬年遺臭面前香火忘知半夜焚香如此數語眞進賢冠公案而又有於青砥夫青砥非有四手四目也乃今世遇無頭沒影事必曰待青砥尉來童稚婦女亦知其名不知青砥之爲官也亦不知青砥之爲封與號也僉曰青砥青砥之列以閻羅比以天師萬世而下其間祇爲人乎爲神乎及太平記所載謂其

へ13
3145
1

直剛毅與人不苟合無一毫妄取平生無
私書故人親黨千謁一切謝絶之惟其無
妄取故一段靈慧之性不爲錢神迷昏作
其無私書故一生正直之氣不爲分上壓
倒宜當時京師爲之語曰關節不到有閻
羅砥老以笑比滑河清焉當事者須略著
此精神纔好若一味作馬頭上公堂帳了
事胸中既滿者也烏乎眼裏只有七黃八
白階前三尺從事案上片紙是憑吾恐屋

刑本作時

角之雀鼠眞而田中之虞芮頑也抑吾夫
子嘗以片言折獄贊仲由氏予謂兩造陳
煩言迭起不得其情雖萬言亦覺少苟得
其情雖片言亦爲多康誥曰服念五六日
至於旬刑曰察辭於著非徒曾子之告陽
虞又曰如得其情則哀矜勿喜夫子又曰
無情者不得盡其辭當思如何是得情如
何是不得盡此處心未必青天白日[illegible]
漫云行雲流水吾不知於青砥以爲如何

雖然堂上堂下遠於萬里左右藪之耳滑
奸舞文積財弄法吾未如之何也已矣昔
砥公嘗惡吏擅權民有得重罪者求救於
吏吏曰汝當鞫問時但哀求不已我自有
處臨刑民果哀呼不已吏在旁喝道快領
罪去不得在此叫號砥公惡其侵權竟與
以輕罪而去夫以砥公之明不免爲衙蠹
侵權如此乃後之擬招多是衙人用事吾
不知弊將安極也又況擡刀而割者未必

青砥乎願爲一家主者請焚香讀這摸稜
案一過青砥其青龍也其青陽石也磨惡
爲善名青砥在陰爲閻羅自是實話摸舊
序以獻噴飯
辛未肇冬豕兒之日録於無何有鄉蓁光
舍

玄同陳人

摸稜案前集總目録
別録
青砥藤綱本傳
第一
縣井の段
第二
あづさ井の中
緑井の下
第三
青牛ろ段

北條時宗三嶋の神社參詣の時青砥藤綱私小供一さく紙圖

ちえうじの下
第四
六波羅の段
六ちゝ子中
六波羅の下
第五
鍾馗ろ段
せゝきの下
統計一十案
前集總目録完

滑川拐錢圖

古人こまく
他例あ徒儀
松ゝりせ
淺亀ゝゝん
なゝり川
玄同

あき人
みと
ろふー
らうゑん
けうかく
えう
らさー

ろう人
ごぜ
やろう
やもめ
あそび
のうふ
えとめ

青砥左衛門尉藤綱傳

左衛門尉平朝臣藤綱は。相摸國の住人大庭十郎近郷（北條九代記に大場と作る）が
後胤。青砥藤満が季子なり。桓武天皇より四世。從五位下上総介高望王の
ちゝ。姓を平朝臣と賜ふ。高望王の子に忠通とゝ。鎮守府將軍
小五郎これなり。忠通の子に大庭權守景宗とゝ。是則大庭俣野。青砥
等の祖なり。景宗より四世。大庭十郎近郷は。義久と年の役に東軍に
隨從して。宇治の橋に走向ひ。戰功拔羣なりしかば。北條義時朝臣と
ちかく近郷は。上総國青砥の荘。一所懸命の地となさしむ。一書に安房國平群郡青砥河の荘と作る。和名鈔
國郡の部。安房の郷名に安房郡平群郡あり。蓋これなるべし。
相義は。遠ふ青砥とりて苗字として。藤満は藤綱が父
なりしゝ。父の藤満彼とゝ生家させんとて。年才十一のとゝに。真言所に入れて。

その子孫とみゝつ。藤綱元来才智衆童に卓越れば。圓頂細衣の後と。なりて。生涯乞食せんことを願ひぞ。成長に及ぶ。その志又大きれば。二十歳に。憤激して世俗と。そむく。音砥孫三郎藤綱と名告つ。後に鎌倉へ出て。北条時政六代の孫相模守時宗殿に召されけり。されば仕官の望化るゆゑにうべ。有一日宝光寺

宝光寺太平記ハ殺生ち時頼と云。今太平記ハ由くことを改む

二十八歳片瀬川の上ゆく。尿をする牛を罵りつ。牛を俄托を。當時の改道と挾さる行ふ。時宗その言を聞て感偏し。召てその人柄を問ふ。音砥藤満が庶子ぞ。孫三郎藤綱と呼ぶ。なりとぞ言語應答媚を侵ぐ。実に國士の風あり。時宗大きに歓びて。これと近習に召使ひ。ものいくばくも。めぐび。引付の人数に加へられ。倍々ますます評定所の上座に。せられ。左衛門尉に叙せられぬ。されば藤綱。弘と聽に及て名改をさく人は

時宗の法名

贈答せり。その性極て節倹質素を旨とせり。衣服は。布の直垂に布の奴袴を穿つ。朝夕飯の。おかずは。美食珍味を嗜ぞ。その茅宅は。滑川のほとりにあり。屋棟を茅りて。壁に白土を用ひぞ。出仕のとてゆ。木太刀に弦袋を著さりとぞ。その節倹かくの如くなれども。親族朋友に貧れるのあれば。一点どりも財を惜ぞ。必これを救ひ。されば藤綱が。叙爵の後を。煙をめぐるりの少かりぞ。実に本邦の。晏平仲なるかの。一日藤綱。公事ありて。夜陰に出仕せる。行ふ。そのかくさ。ほも燧袋に入れ。持ち。浅と。悟く。滑河へ。渡り入くぐり。そなる物なれば。さても。めぐる。殊文に。周章して。ぞ。その道なる。市店へ。従者を走り。銭五十文を。買て。続松十把を。買て。これを。水隈とふり照して。辛じて。失ける。

銭を取り給へり。後は人食このゝ如く侍りて。あれ白徒なる十文の銭を
赤んとて。五十文の續松を費せり。所謂小利大損なりとて。あざけり給へり。
藤綱又このゝを見て。されば世間の人れこゝろを愚なるはゝのみて世の
費をも忘れ。國の貨をも粹を民に恵む心のなくてそうゝとそれ。
失ひ給へる銭十文は速に足を索ざれば。滑川の水底に沈く。永く人間に
日の目を見ざるべし。又続松を買給へる五十文の銭は。商賈の手に入りぬれば。永く
失ふことなかるべし。もしれ損を。商人の利なり。世の貨永く融通
を絶ふ至るべし。彼と我と。何の差別あらん。それ五十文とはいへど。十文とはいへ。
彼此六十文の銭。ひとつも失はざるこそ。天下の利ふめるぞや。と仇弾しく
いひしばらく。たゞめ難しなるの。舌を巻てそ感じられ。そのち識者これと
許ちぶく。宋の程子。嘗薙草地の名もの間ふ行ぶことあり。学者六七人

従ひ行つ。一日千銭を拾ひね。僕者驚きて。とれ晨装のとれ忘
れ行ふ。曝ふ水辺渉るとれ忘れ。彼銭を洗ふこと。
程子これを笑て。惜こと甚し。同行の人の冷笑て。手銭を微なる物
みでふ惜ふ足らんやと。又一人。水中と嚢中と人の区と人の得
ることを。一ふこれ視べいで惜ることを嘆ざるといひしばらく程子
これら教えをうけて。人苟ふ彼銭を拾べ。これ拾ふべ。今迄水
とれ。何人のこれと用ふべれこれ
二程全書ふ載ることとして。教ぶるのこと。
ゑ。青砥がこゝろ。よく程子ふ稱へり。信ずるこの一條ふ。
人口実に。三尺の童子も。滑河といふと。必青砥が故事
ちわり。件の川を。上中下ふて。その名を異ふて。上ふこれと胡桃川

ふ。浄明寺の前より下さまざと。滑川といふ。その下。文覚屋敷の邊ふ。
坐禅川といふ。文覚鎌倉ふ住りし日。此ふ居。坐禅せしゆゑ。
なん。その下小町ゆくさ。夷堂川といふ。その下延命寺の脇大鳥居の
ふもとをとり川といふ。その下閻魔堂の前ふて。閻魔堂川といふ。
六名あり。藤綱が茅宅へ。この川のほとりなる。里老のいひ傳へ。
今その処定かなるべし。ある時徳宗領ふ沙汰らで。地下の公文
相模守貞時と。訴陣ふ番ふるゆありけり。理非懸隔して。公文が負ふ所。
道理なりけれども。頭人浮定奥。皆徳宗領ふ憚く。公文を非分ふ云
ふ。負さんとたりる所ふて。青砥左衛門のこ。權勢ふも憚らず。理
當るところふ審ふ遍く。貞時ゆ。公文を不責。
利と決て。所帯に安堵さるべし。その恩ふ報ふんとやふ。銭ふ

三百貫束藁に裹ふて。後の山より。潛ふ青砥が坪の内へ入れ。
ふ。藤綱これをみて大きふ怒り。沙汰の理非を演べ。相州貞時と
思ひ。ちなる故なり。今く地下の公文を見て。負ふ。引出物ふ
取るべくふ。御悪名をまうし禁ぜ。その悦として。相模殿よりこそ
給ふべけれ。沙汰ふ猶ふる公文が。引出物をべきふ。あらずとて。一銭も
受ず。遥ふ遠き田舎へ持送りてぞ遣る。されば藤綱。所陣ふ
暗ふて。理非を沙汰する毎ふ始終眼を閉て。訴人の面を見ずとぞ。
人貪その意をもらべ。ある人言の序ふ。その故を問へば。藤綱答
されどとよ。人の容止と。似ざるものぞ。そもうちこそ。
憎さげなるもあり。又あれらしれあり。信らしれあり。頑しれあり。その品多く
もそ。べくとふ数をもらべるところの真らしれとふ人のいふとふ。

ゆるすも実と成べき。頑ゝとして悔ゆる人のいふるゆへ偽りとなす。又辰ら〻た人の訴を誣られて憎さげなる人の事ふ。如くなられ。憎さげなる人の事ふ。巧〻いひなすとなんとなく。これ〻の類へ。つゞくる所ふ。仏も殺さるべし。彼此いまゞ言ふ所生さゞれ先ふ。そもつゞく仏のうちも。彼を邪なりとへ此ハ正しかゝんハ是〻ん非〻ん。とつゞ心を師として。ゆゑ決るなるを論ぜ言ふを聽ふ至て。つゞくるを方ふ引れて。怪惧と多くの訴陣に頑〻辰ら〻た。ふ憎べたりのあり。憎さげなるふ憐なるたとあり。真ら〻たふ偽りなり。頑〻たふ直なるあり。此さうひ特ふ多ゝ人のこゝ偽り知りがゝた形色をりて定心と稱ふ。古の訟を聽りのふ言ふ。よりて聽ことあるよ。物ふ云ゝえられど。それハ恥も顧ふ所ふ人の人ゆゑて藤綱が如きん。常に覆ることなゝ。この故ふ始終眼ハ閉ふ。

訴人の面をんゞ。只そのいふ所と。ゆゑつゝ。理非を定るのこゝ。ひとしあるなり。八幡殿義家ハ評して至極の悪人なりとぞ。現義家朝臣ハ強弓を鳴らして。物の怪と消伏ふ。勇将ふをらせ。武徒面を見れつゝ。いと逞しくこそありけるふ。婦幼の目をりてこれを見ハ。悪人とも云べ。なるべし。色好みなる心より。悪人なるふんとなられる。義家の気性媚ゞ。侠ゞ。武をりて朝廷のもん衛とをり。その人となり。ゆゑ。又訴陣ふ出るの。雖ふ。ゆゑ。と。ふ。ぎんぞ。ゆゑ。たゞ人のこと。頭人いゝ。彼と罵り懲ゝ。ゆゑ。理を述ゞ。その情を述ゞ。ゆゑ。理ふして非とせ。ふ。ゆゑ。ある人。又仏ゝ。言ハ巧て。ゆゑ。掠んとするのゞ。ゆゑ。懲ゝ。ゆゑ。妨ゝふ口とも。ゆゑ。真実ふ。伏をハ稀なり。ゆゑ。藤綱

游陣ハ理非をとろつ毎ニ威をりて徴をとて紙せず。只理を推て彼ハその非を知らせんとするのみ。辞を安寧ニして。民を安ずよと曲禮ハ本ハ

あるもあらずや。といひしーるべ。同者坐ハ感涙ハ流しを退てる。又ものとい

相州貞時。書紙左衛門ハ同ものひるる女う。先代恭時ハ。富家特ニ善政

多くり。就中。祖父最明寺殿時頼ハ三ケ年の間。抖薮行脚して。窮ニ人の

善悪邪正ハ窺ひ。ひしーるべ。善人ハ近くこと。悪人ハ退くれ。愁眉ハ開く

ものいと多くり。このゆ今ハ至て。人ハ膾炙をこれ又最明寺殿ニ倣て。

潛ニ國々を編歴し。守護郡荘司の邪正をちふんとしるふいるふと。同ニ

くべ藤胴弱とハ。ものとろて。ひいこ。ハ。ハ。ものとろて。仰ぎらけ。ものとりしものれ。

天下の執捨とし。いるべかりて。抖薮行脚のとなれてものべものふべ。

ひし最明寺殿の。諸國を行脚しものひしーるべ。只その目と形と。耳と憑ものふ。

あん恨とこそひゆ。ん人の目ハ物ニして見えざるものみれども。紙

一隔隔まべ絶て見えず。耳ハ声ニして聴ざるこなけれども。数町の外を

聴えず。ものの國々を編歴しものふ。ものる所と聴くあり。ものる

ものよ。戸を出ずして天下を知り。牖を窺ずして天道を見る。その歩る

こと。弥遠けまべ。その知るものいよ。ものして紙りて聖人ハ仍ずして知り。

見ずして名付て為ずして成と。老子ハいひて。又易の上ノ繫辞ニ。故ハ能

天下の志を通ずれば幾し。故ハよく天下の務を成ば神なり。故ハ

疾ずして速く。行ずして至るといひて。されば兵法ハ。謀を惟幕ノ

中ハめぐらして。勝ニ決ずるといひしもこのこと。孫子ハ兵

目ハ見ん耳ハ聴く。而紙りて政を。天下ハ布んと。ものとろハ。營りて其ニ

窺ふ。ものとり。拒蹠ものべ。只行を脩德を蘊。忠信孝悌とものべ。

あらず。士庶その德澤ふ淳化して。こゝろ向あらはゞとも。邪兵を地ふ
ゴロ起べし。爵祿のこゝ物体ゆゑ。こそゆゑと叮嚀ふ諫ゆゝ。貞時ふ
その言を是として。ちもく仁政を施つ。普く民ふ惠をたまひしゆゑ。
四海無異ふして。賊吏奸民なりけり。ちかころ青砥左衛門が勤功ふ
よれりとて。莊園數宛給はけるとども。加恩のゆゑ一所も受ず。甚
幸ふ評定衆の上坐ふ列はゞ。俸祿ゆふあらば。あらるゝ今故なくして。
許妻の地を增あらんふ。凡日本ハ六十餘州ふぞおりて。その地ふ限りあり。後日ふ
いかゞんのゆゑらん大功ある人ふ故なく賜所を編めあらば。ゆゑ
りてその人を賞ゆべきと推辭ゆゝとよ。ゆゑあるて默止さんとう。
かゝてある時最勝園寺殿貞時鶴岡の八幡宮へ通夜ゆひる曙ゆゝの
夢ふ衣冠正しくあるゝ老翁一人。忽然ゆて枕方ふ立在。改道を直く

ゆて。世代えしく保人とおもゆ。心ざゝ私なく。理義ふ暗ざる。青砥
左衛門を重用ゆべしと正しく示さはゆとこゝく。夢さめおわり。貞時
晨ふ帰宅して。近國の莊園八箇所。自筆ふ補任状書て藤綱
あぞ賜りぬ。そのとて青砥左衛門を補任を披ゆて大ふふ驚き。
是ハ今何ゆゆゆゆて。三萬貫ふ及ぶ大莊ふ給りゆゆゆと問ゆ
けるに。夢想ふよりて。元行ところなりと。答ゆひしゆゝ。藤綱貌ふ
更てさゝゝ一ケ所も。えとて賜ふはまゝくゆゝかくのおとくふ輕名ふ
もん計を。一入歎しくいひし。物の定相ゆふ喻ふ如夢幻泡影ふ
亦如電とこそ金剛経ふ説はてゆゝり。基ゆ首と刎よといひ
御覽ぜられゆゝ。咎ゆゝとも夢の如く。行はゆゝんゆる孫。報國
薄しと。起涯の賞ふ蒙ゆゝんゆる。これふ過る國恩ハゆゝゝとて。

補任を逐ひ進ませ給ふ。藤綱が潔白清廉なること、さぞかくの如くされば時宗貞時二代に仕へ久しく評定衆の上坐に列なりと云へり。理世安民の政道正しく善みハ主君を稱し、悪をば身に負て民を北條ねしの仁恵をもつぱらとせり。努めて主の非をあらためて、ひろく名を取ること、なるべし。万民ともに其の徳を慕ひて、これをそしることなかれ。其の母を慕ふがごとし。夫必人よ儁なる而あん惜哉記者筆を絶てたの全行況んや足ふべし。今僅に太平記北條九代記。鎌倉志。この餘軍記雜籍小載する所を抄録し。更に街談巷説を編纂してこれを摸稜案と名づけ。蓋摸稜とは。蘇味道が故事を取るにあらず。作者摸稜のこゝに成るのこゝ。姑く虚實を問ざれ。

辛未初冬端三

青砥藤綱摸稜案巻之一

東都　曲亭馬琴編述

縣井司三郎禍を轉じて福を得る事

伊勢國鳥羽の湊に。縣井魚太郎といふ商旅あり。毎歳に堅魚脯川上茶。山田の塗折敷などを種くの商物を。鎌倉へ推送り。その利も私の表乗して彼地に赴く。凡半年あまり逗留して在鎌倉する。大小の武家方うち廻り。半季限りの賃貸して。賣買の利潤を獲ること。もとより多くの魚太郎とは。その性篤実にして。学問読書を好む。事に孝行なりけり。さはよりて。老母の世を在りし日。郷里へも。ひとしく。遠舎へ。ぐらゆくことを。せざりしが。近属その母を。ひとりて。家に。妻と。大稲と。小厮二人ばかりなり。もとその商物も。他に委ねず。不便の

多くの財ふ。その母既ふなくありにければ。やうやく後やもく呉てのある建長七年の春より。鎌倉へ赴くといへども。高利を射ど。討價せざ偏ふ実我りて物ふ商ふ行ふ。四方の花主。是ふ稱美して多くふ魚太郎が物とのえ買ひ。されば魚太郎ハ和漢の学ふ長て。諸史百家の書を見ざることなしといへども。商賈の博士態ハ似げなくて。憎ひのみなれば。氣をてもも見さられば。誰ふハ彼が学術を考べきに。只凡庸の商賈とのをありふ行ふりのみ。かくハ賣買の便宜を知られども。利を微して貸ふ。いくを債ふ。もかくもあも。妻子ふ養ふふ足とふハ。神社佛閣に詣ふ。柿沢楓をあがめて。おび暮らしふ。又間あるふハ。書籍を閲して。その世の人と友とせしふ。負ひといふハあふ。孫ど富べひはもありけり。ふ。ふ魚太郎が同郷の商旅ふ。金刺利平二といふのあり。是も種くの商物を鎌倉へ推送り。毎歳ふ鎌倉へ赴くとて。太郎と同紙をさるふらふ件の利平二ハ表淵達ふして裏ハ極ふる吝嗇なるが。よく人の氣を取る術を知られば。これが商物を縣井ぐより價貴けれども。辯侯ふ被られて賣ふとありつも買ふの多ふり。又この利平二も頗学問あり。田舎の土氣こそ脱れ。辯舌爽ふして火をも水ふいひ消その口才ありて。とりて。鎌倉へ赴くの日にても。和漢の故事を説今昔の物ぐりみどて。その席を奥ふるの常なれば人貪その才ふ感服して。商賈ふ。いと惜ひ博士ありとそ。これが為ふ形を改れりの少かふびかくて一年縣井魚太郎と。金刺利平二と同紙して鎌倉へ赴くとて。鳥羽と出帆ふる。乃紙ふ紙中の徒然ふ堪ざるふ。この二個の商賈ハ和漢の史伝を輪論故事舊説を考證して人ざるもせど清談時を移せ。魚太郎ゆ

嘆息と利平二その氣久と訝りて和殿こそれハ同郷より生れ同郷より人と
なりて。その活業も異なるべ。好む所も又多くして幼稚とたとへ。その師ハ
共ふしつ。物をも学びされ。ちうれべ年来兄弟の如く交りて何あまり
ハ一ヶ月なくうち相談とあるふ今何の故ありてう。忽地ふ物を忘ひうふ
ぬく。吾倚が如き瘦商賈の青史の端をも閲して天朝異邦の故事ハ
諳じ物の善悪を辨ずること全く泰平の餘澤ふ。とてとうるに幸なり。
されべとて田舎ハ言ふ歟となるのなれべ雅俗の差別なく。うち
相語ハもん才のこれ又何を匿べ。ちとほ如く。吾倚ハ只一個の
男児ありし。往ふるべ母の長ハ病著ふ卧ずしる折佛菩薩ふ祈願しつ。
母の病を平く愈せるべ。一子小太郎ハ出家さして永く佛恩ふ報ひ。

ちまくんと稽りまうしたなりとぞふ果して母の長病差しぬ。拙者小太郎と
ハ才のとて輪清寺へ遣しく。弟子にちうりけるる。隔一年ありて。彼寺の
住持。紫紫なる何ぐの院へ移時しまふ折。ぐ児とも携りて彼地へ赴て
もひつ。とび佛門へ入りしてハ。ふうとび家ふ還ることを禁ずるとば。家信
既よ絶て。又三年を経ぬ。今茲ハ十二歳ゆやなりねんかくて
つぐ母の病著。その度ハ差ふれど人の命に限りあれとや。齢六十一ふ
ちて四年以前ふ世ハ逝ぬ。葬の衣を脱うえて失持の涙をおさめつ。
去年の春ハ又めぐふふ女子ハ奉さうしに。ぬ。ぬ。名地哀しなる
強禅の中にうくなりぬて。ちうほ。い。行もるく女房大稲市
ちゃハ八月ふなりれ。活業ふいひなぐら。彼ハ人捨て遁げも鎌倉
赴けべ。つぐうふふハ孫信て仏ほちも待つ年。大稲ぐるい

不便なりと思ひおりしに嘆息して懐れしく。とゝくに利平二才てうち
微笑まこと一子出家とすると云ふ。九族天に升るといふり。加旃。和殿に至孝の
人と。一旦幸なれるものれば。そこ。いつまでもくてとゝくべれ此度の安産
難ひなし。ふく仏とる労しまひそ。其ふ就て。某が女房難し懐胎
又八月ゐ暨べり。某齢四十ふ及びてこゝ
さらるりこれも又仏苦しくふるゆ。いつそで和殿よ別くべき。ちうんとも。遠く
故郷と離うゝ。原足結業の為なれば。仏つよくも忍ひ久してかゝ紅行
ひひて。ちうはふ和殿の内改と某が女房と。産の臨月なるゝ。こゝてかゝ
奇とゝ。此彼共ふ安産して。和殿の子男児ゐて。某が子女児なゝば。
縁祿の中ふ云号て成長の後婦ふ進ゝとべ。り和殿の子女児ゐて
某が子男児なゝば必ゝるゝ人生嫁しるゝ。又和殿の子も某が子も或へ

男児或ハ女子のこるゝば。幼少より義を結して兄弟と永く親族の
睦ひなさせん。とのるいゝ。ゝとゝくべ。魚太郎大ゝよ旅ひて。これ
微妙も計りるふりのゝゐ。鳥羽ハ萬戸の湊なれども。仏とちはゝ友
ゝちハ只おん身のこ。今日の言努〻変改とべうゝとて。漕て船人が
齎る酒を仏て。ゆゝ天地をゐふり。河伯と祝し。迄よ誓を立て子供らが
婚縁のるゝ約束しけく。共よその妻の安産とそ禱ける。かくて日ごろ
孕て。その松田井の湊ふ著しゝば。魚太郎利平二ハ。定めゝは旅宿ふ
逗留して。例の如く物ゝ鬻ぐこと。凡三四月ゐ及びゝ。ちうふこの年
魚太郎ハ。舊貫のとゝも裹ら称べ。故々のる。仏ゐいかるりめゝ。
生憎ふ逗留とる紀ふ。利平二ゝ所要果しゝば。魚太郎ふ先ゝ
伊勢のる羽へ立ゝるに。留ちゝる小厮ふ。港口へ迎よ出ゝ。利平二ゝ

渡海の船中
魚太郎と利平二と末生の子のみふ兄弟縁と約束し
利平二
魚太郎

鳥羽のみなと

その妻のうを問ふ。いねる八月十六日に安産しのひぶ。女子とぞ申さんと
いふ利平二を女子とやて。今又ふ物見くふね心持をそれども。母子ともに
つが恙なくて肥ぶちねとの人ぶ。ふく歓び。扨魚太郎の内政へいりあといくく
これも八月十五日に男子を生のひねとふ。利平二点ぶつ。遠くくるぶ
宿所へ立ゆくて妻子に對面し。出生の赤子ふ抱くくふ。玉ぶりて造り
ゑしくる如き。女子なり。こぶ子なぶらっ。微妙もいでまゆ。ろとふふよいと
喜くくて。膝の上ふ抱とり。この赤子八月十六日ふ生れそ其名を
十六夜とぞ呼びぬ。かくて利平二ハ曩ふ鎌倉へ赴く。兵船中ふて。
魚太郎と約せしうを。妻の鞍ふ物くれハ鞍を持ふ歓びて。そハ低く初の
縁ふ付ぶ。過世より神ふの結びあひしふふ。こく彼家ふ赴きて。
魚太郎ねくも恙なく。遠ふ出ゆくとも告ふ人ぶ。

利平二ぶて魚太郎が宿所へいりあて。安産の賀と述ぶ。船中ふて此世ぶ
子どもらぶ次説示せぶ。魚太郎が妻の大稲ハ良人の恙なくはこゆめて。
ふとぶめて安堵つ。又子どもらぶ婚縁のうを次ゆめて歓ぶと大くくよろこび。
ちこく良人の帰る日をのこ待ゆどた。利平二ハ魚太郎ふ赤子ふ緋縮緬を
遣くく。その妻鞍も消息くて。ちくく源井の母子と訪ひ慰めくく時ふ
文永三年秋九月九ふの日。縣井魚太郎ハ鎌倉ふ罷り出くく女房
大稲が安産を歓び。曩ふ船中ふて。利平二と約束くくを物語くく。
彼人の挙たるふ。女子なるよくと父子ふ
こて。大稲ふいふ。この赤子の面ふ
秀くく。鼻のうるはくくる。親ふそ生れ
数代民間ふ零落くて。祖父の財ふ商賈ふ

武盛より生でいと忘くも柏原の庶流なり。子孫り。大志と天運と二つなり。
時ふかるふりのいでまうゐ。家を起そともめゐ。いまゝ年の仲秋毎ゐ
司石の除目と行ゐ諸の司拜任の輩ゐ石そるゐとぞ。春の除目を孫石と
いふ。その義司石ふ也。但春ハ大政官ゆて行れ。秋ハ外記の廳ゆおいて
石御そとぞ。教隆卿の記ゆハこれそる。つゐ子今八月十五日にけれゐ。
見則いふ〳〵司石の時ふかるゐり。その生月を言祝んとて。ゆゑ司之郎と
これと名つけ。金剌ゐ宿所を訪て矢ふ妻の安産を祝〳〵祝されて。いよ〳〵前
諾をたゐゐと子どもらゐ成長の後婚姻をとり行ゐべきよしを議定〳〵つ。これ
よりまたく親をかさねて。ゆ家ゆ代るゐ〳〵交参ゐ行ゐ。隙ゆ〳〵駒の足掻
疾く。司之郎。十六夜ハこゝや七才ゐりね。ちゐはゆとこの年の秋のころより。
孫井魚左郎ハ。風のこゝちとそうち臥〳〵るゐ。鍼灸茸餌も驗なく。冬の

そゐめふ至てハいとも危くゐえ〳〵ゐ。妻子の周章大ゐとゐふゐ。金剌
利平二も。毎日に治まて病を風ひ。その妻の鞍も。食物ゐど贈りつ。叮寧ふ
訪ひ慰ゐり。ちゐれども魚左郎ハ漸〳〵に衰く。臨終遠ゐじと考へ〳〵ゐ。
有一日利平二を枕方に招ゐて。司之郎ゐ事を憑ゆめえ。今より後ハつゐ
鎌倉の新主ゐ。咸ゆ人ゐ進ふとゐ〳〵。只願くハ女房大稲ゐ力と戮
壮郎司之を教育して人となゐてゐつゐ。草の原よりゆん親ゐ。後の世の
栄を祈ゐ〳〵。と云ふ声もいと細ゐて。呼吸繁〳〵ゆめえ〳〵ゐ。利平二ゐ
一紙ゆも及ゐ。こゐゐりゆゐるまでもなし。和殿の子ハつゐ女婿ゐ
因政ハ。つゐ女児の姑ゐり。いゐ。ゐ同ふゐ〳〵。
保養ゐ人と。ゐ〳〵。魚左郎ハ。と欲〳〵ゐ。その夜〳〵
ゐりゆけり。かくハ大稲ゐ哀悼ハゐ〳〵もめふゐ。司之郎も。ゐや寒暑ゆ

ある年才なるふ。その性孝心篤くして。父と慕ひて泣叫食物ぐるり
えぐれば。利平二夫婦ハいとゞしく哀れよそそて。親切ゆ母子と慰めよ
宵ふ眠ると後のゆゆとり行ひ。過七の追薦仏るゆ。かうゝ浅草屋ぶ
連りつ。元来魚太郎夫婦ゆうゝゆ。果敢くしく親類ゆうゝしゝ。利平二ハ
主人ゆ代りて。内外のゆ沢りのるゆぶぞ。大稲ハ世ふ憑しくおりふりめら。
かくてめゝべきふめゝ紙ゞ。小厮ふゆそ月の暇とそゝじつ。大きゆうる家ぶ
賣て。ちひさげゆる芥屋ゆ移ゆ。よろゞ良人の世ふあり。ハ仏ゞ
あゝゞ。五年を送る行ふ。司三郎ハ五六歳より。父ゆ従ゝ。大学近思録
ゆどゞ素読せ。記憶ハ衆の童ふ抜れて。下らび溜る草句ゞ絶て
忘ゝるゆなりて。父ゆくかりて。更に利平二ゆ従ひて。さらく讀書
稽古をるふ。十一二歳の比及ゆ。大ゝの書を読うゝ。詩を賦し

文ゞ作りて。人の耳目を驚ゆる。さゝ行ふ金剛利平二を
縣井が名主を。慈くゝ受て。年〳〵漁倉ゞ赴くゝ。その利十倍〳〵
ゝゝ五六年が間ふ所帯ゆゝけき人となりね。ゆるふけゝゝ。北條越後守
題時朝臣武蔵国六浦の荘金澤ゆる称名寺のゆゝに文庫を建立て。
和漢の書籍ゞ殿寄ゆ。儒書ハ墨印。佛書ハ朱印を押し。印文ハ楷
字ゆて。金澤文庫の四字ゞ堅ゆ書ゝり。是則在漁倉の弱刀徐原ゞ。
学問所とゆきんとなりこれふゆりて。東国西国の学徒ゞ集ゆ
めつまるとゝゝども。いまゞ学所とそゞれ人を獲ゞ。顕時此彼とゝゝ
ゆゝ年ふ。歳〳〵漁倉ゞ来る。伊勢のゆる商賈。金剛の利平二ハ年
来顕時の等宅へも来りしゝ。彼ゞ学問の勝れゝるゆしハよく志ハ
折〳〵顕時ぬゝ見来て。和漢の故実を論じゆる世しるゆもあるゆ。元来

達辯口才める利平二なれハ。顯時その才を愛し給ふぞ。その年又利平二ハ藻倉ゑ逗留と。有一日顯時ハ利平二を召して。金澤の文庫成就のくゆを說給ひし。学問いまだその人を獲ず。渉り商賈よりさりせば。その任よ堪ゝるものゝ。先祖ハ流浪して。伊勢の国ハ住ー。商賈とりてゝ人ども。家系連續して。兼て。不肖の某かゝる所業を面目とこれ有ることゝ思ひ。嗚呼鄉人ハこゝるこれとあれり。某勤ゑ学問ゑ志ゝ。ようせーより。仕官の中ありとゝ人ども。故なく祖先の産業を破ゝんことをあそれて。今日ゑ及びと。ようせーゝ。顯時ハ大ゝうち点ゝ。原来名たゝき勇士の後裔なり。

ゆゝ。汝がゝ不偽なく。仕官のゝ。今よりゝ三百貫の莊園ゝ与ゝ。ゝ仰ゝ利平二ハ歌びて謹ぐ言受ー。その日ハ旅宿へかゝりぬかゝて次の日顯時ハ金剌利平二ゑ衣裳刀ゝ与ゝ。六浦の莊司と。兼て金澤の文庫ゝ。利平二ハ改めて。金剌圖書と名ゝ。故鄉へ赴ゝて。妻子と携ゝ。ゝ仰ゝ。金剌圖書ハ天へも叶ゝ。ゝ取りのもゝ。伊勢の。ゝ妻の鞍女児十六夜ゑ。ゝ福と說ゝ。家庫ゝ人ゑ與ゝ金ゑ換。その餘所ゝの金銭。家具雜具ゝ。一艘の船ゑ積入れて。由井の濱へとゝとれと遣ー。今ゝ呂仕ひ。ゝ小厮ゑ。ゝ暇ゝ。ゝ家ゑ久ゝ。ゝ光僕繁市ゝ。ゝ女児ゑ弱竹と。年ゝ十六夜ゝ腰元ゑ使ふりのゝ。只ゝ親子ゝ供ゝ。

東海道とぐりつ。妻子をゐて鎌倉へまゐりこぶ。顕時とるのうち。金沢
なる文庫のほとりに宅地をもとめ。日ごろ彼所へ移徙して。若党奴僕
十人ばかりに召使ひて。いと目さましく挙動とりあつかふ。流石に年来
伊勢の国の羽より交加くる高貫なれば。学徒もこれを侮りて従ふ。
荘客市人ども。これに綾りて。その下知に従ふ。金剛に富る者なり。
今亦六浦の荘司とうけまろりこれば。主の顕時朝臣と岌に被くとて
らと物とも世ぞ。折ふ觸て。貧に書生荘客へ此ばかりつ銀と貸て。
後あり在鎌倉の縉紳へも。利を微して金と貸と行ふ。貸ようにて。
世の人情なれば。とぶめ綾とゆも。これに媚侮りたるものもあるに
敬ひ職禄のひと高きも。途に金剛よりあとに。却て腰と折あり。
されば金剛圖書は。貨殖ふさるにたりのるれば。貸と貸ちどの金を。

執拗時宗朝臣（最明寺時頼の嫡男北條相模守）もあるに見ふして。ことよりて威徳なるに
ようなれば。これ見ようえて。縣井魚太郎が後家大稲。その子司三郎は。
頼む樹下に雨の漏るこちして。親ともふ金剛は。遽しく妻ふに
わて。鎌倉へ赴けよう。手を拭れども音耗せぞ。世ふつれ時に臨ては
親き友も訪ぞなれば。世ふる業も仮著を失ひ。母の大稲と。濱芋に
績で。司三郎は磯網に編。ふる細き煙をうるふ。司三郎は。ひとりの
孝行なる少年なれば。ようぐ母の言葉ふ悖らぞ。家はまことに
なれど。母は煖ふ衣せ。物よく食し。いと真実ふ勤り。学問ふ
好む道なれば。磯網と編つも。書に流く音義に正し。学問ふ
みうしぐ。彼薪に樵つ書を閲し。巻を開て。麥の流るとちぐり

けん賢人の迹を彩る。夢日ゆるけの。かくて五六年を経るまでに司二郎が
学問まことくまことにて。七歩の句讃を授ける。金刺ゐんどが及ぶ所よ
あらず。されども網引海松とる人と。漁人の。却彼が世ならぬ疎なる
笑ふりのハあれど。その学問の好文と。ある人後くなりぬ。さる程ふ
年月を年代謝く。弘安六年にあるろ。時ハ司二郎十八歳。身あるを
つゞれの衣を被て。窶しくうあれども。濱風あも吹ならまれど。色白く
膚清らかにて心ざゐ賤しくうゞ。譬ハ泥中の蓮砂底の玉ハ似られど。
いつまでとく貧ハ堪ざれば。朝ハ放げども。夕ハ足らず。今ハ宮ふ
せん術竭く。司二郎ハいとゞしく心苦しくぞ行ふ。母の大稲ハ操ゝしく。
とろ怜悧者なれば。ある日つゞ子を激しくうらまう。ゐん身が物ぞひハ
貧の病ふ醫師を索ゐくなるべし。ゐん身が父世ハ早くもなりぬ。

ゐ。雛猿の枝を離れ。雁陣の侶ハ喪ひしふ異なるべ。さりとも和み
くれ金刺ぬしハ。鎌倉へ移住く。絶て一下るとも。音耗ハなりけ。
今又ふ拉ゝ言ハ忘れ難ぜ。つゞくゐん身が人となりとなるふ商賈ニ旅
べうもあるべ。吾倘艱苦の中とらへども。孤しうぬ淺十貫文あり。
こハ各ゐて腹に。乾しつゝ貯ゐるゐハ。ゐん身がうへ見るゆゐん時。
吉ゐもあれ凶ふもあれ。そと調ん為なりけ。これを路費として。鎌倉へ赴て金刺ぬ
いでゝ。はれもなく歎ぬべき。吾倘りつともにゆくべ。ゐ
ちゐへ。と薦つ。件の淺と。貧子の下ゐ。遍ふ。
司二郎ハ坐ふ感涙ハ拭ひめ。ゐ不肖ゐて。只ひとりなる母ハ
養ひ。ゐるゝハ。今又かゐる仰ハ。罪いとゝ。

前年鎌倉へ両三度商旅をめつゝして。書状を進ぜられしに。竟に
「とゞも返簡なくて。ところ好ぐらゝ人ども。すゞ試ふ彼地へ赴べ金剛
ねし訪てえんりゃんと意して。物りうね身の後ゆとゝろ。日るゝ西ゆ
行装ととゝの〻。故々人ゆ別を告。鎌倉を投てゆく行ふ。日を経て彼処ゆ
到ぬし。すて金剛図書ゆ訪ふ。その第宅ハ金澤稱名寺のほとりに
あり。とゞメて。ゆゞて朝夷の切通へめぐり出。その日を野嶋のほとりゆ
旅宿を求て母が長途の疲労ゆ勦て。次の日司之郎ハ只ゆとり。金剛
図書が第宅へいゆて。姓名を通ぜれば。且くして。ゆとゝへと呼入ぐゝに。
ゆふゆゆりして。毎房の奇麗なる。庭ゆハ四季の花を植て。松檜ゆ築墻と
りて。假山あり。曲演あり。樓廊。書院数奇屋なんど。悉ハえねども。
目を驚さんといふことなゞ。さてゆたぎの若堂ゆ司之郎と書院の鄰房ゆ

居ゝして。茶ゆとゝめゆどとる行ふ。主人図書。緑類よりいぐまて。
上吐ゆ推處りつ。別離後の安否と汎問頻ふその成長を嗟嘆とれば。
司之郎ハ恭しく郷を著。先生當地ゆ移住しゆひてより。とゝや七年ゆ経て
ゆゝが。ゆりく消息して。安否ゆ問ゆるぐゝゆふりのゝら。両三度郵書と
呈ゆるといゝども。報簡を惠せめらゞ。ゆハ公務ゆ逞なゆよめふゞハ必
忌諱ゆふるゆゆゝこそと推量り。その後ハ公ゆふゞも。胡越の如くうち
ゆとゝのひき。ゆられども。久しく先生の風彩ゆ拜しゆまゞゞ。いとゝうらしく
ゆゝひゝとそゆられゞ。身の寡しゆとも顧ゞど。推参しゆとゝゆなゞと謹
演しゆゞ。金剛ゆメて苦笑し。よくゝそ訪れゆと見よゝ。ゆがうち相語べられ
けゝゆ拭ゆ動の驚くて。應答る皇ゆ。すゞ旅宿へ退ゆく休息。再ゝ
ゆゆまゝ人といひうけて。衝と身を起しゆて。奥ゆ入ゝふれハ。司之郎ハ図書が

胸中と猜して原まこの人殺跡しるつぶ窶しをと忌嫌ひ。ちや前若は
鞍くみこそと必ひしるぶ。袖を拂くゆりかくて金剌ぷいと不奥の氣
便室に入りみるれば妻の鞍傍に居よりて絶てひさしれ司三郎の故郷
ちりまるるよしを仕ゆ付りて。屏風の背より闕窺付れべおりふあいまーく
美男子みなりみを被しる衣の汚れ垢つたる。いろは貧しをは堪ざり
けんいと痛しく必ひ付り。ゆどて涙ーまひしは。此方へ留めて故郷のこと
をも仕ゆまほしをふとのひつて涙きーぐそを圖書へえくりつ冷笑ひ。
さおりあい婦人の仁ぶおりふ不異なり。彼壮佼形の如きざ及ばーく。
逆ことをふまるこれ恥をきるるためぶぶや。その恥を恥とせと。
取ぐ中くこれを訪ふる。故なるふあぐるぶ。身の貧しをは堪難く。
盗せーが殺をて故を放れしる歟。さるふ人の女を奪て奇しはあ

難尤賢如此婦人難多得

疑ひ。さほをふるも考正さぐ。ぶ家へ引入れなば猶を招くに
庶幾しを。をけて。うち解て捐ん相治ど。強面をせてくーたりとくろ仰
がるれ說示せば。鞍を叉て嘆息しさおばしをふ理をなれども。そ只打見
るふ不より。疑ひの起るのをつらくるると案ぐふ。彼人をく世幸なくて。
幼稚とて父を喪ひ。親とも師とも憑ん。お身をさ人捨られく。奚
ちて家を人とるる。母は養ひ付るる。窶しくもなりぬぐーはや
沒を窶れしるとも。人品骨相物のいひざ及。天晴愛るれ壮佼。じめ
女児十六夜と。彼壮佼がけるくころ。魚太郎ねーと指言ひとをるふ
るるもあり。況て十六歩も。生ぐるはくころを付るぐば彼人を
よーて且くこるに逗留さし。挙動を驗く。女婿にとぐれ器量の
母れりを共迎とりて養ひるる。言とも負ぐなれ人も草の

ゝりいろどろ。喜〳〵とゐ忍ばせもあへど。金刺ハ煩ふく
あろに眼祝睟り謂なれ婦人の截判ぬ〻ゑんどぶきろことなくゝど
縱ゝれ魚太郎とはじめ約束せゝるゆゑ聘を受ゝゐも
あゝぶど。且ゝとろハ。ゝれも彼も商賈ゑれば。その婚縁相為せり。今ゐ
至てゐちゝゝび。ゝれハ北條殿の家臣ゐゝて彼ハを頼の浮浪人ゐり。此
誓義相為せど。いゝで微生が信ゐ做ゐて千金の女児ゐ捨ゝれ丈給
鎌倉の縉紳。十六夜が容止の。世に勝ゐとゝ侍ゝ。媒妁りて娶ゝんと
いゝ〳〵も殿めれど。北條殿の一族狄。さゝぶどハ一國一城の夫人ゝざゐと
いゝせんとゐふ故ゐ。それゝゝいまぶ婚義を定めど。女子さゐしくて。牛
賣損ふとゐふ諺ゐ。今ゝそゐひあゐるなれと苦り切て呟まど。鞠を
いゝ〳〵説破ゝれて。又ゐはもゐろけり。さゐ行ふ縣井司三郎ハ測測

とかゐれ花ゐ川の人のゝゐゐ定めゐれ。金刺が肚裏を十二ゝゐ推
量して。ゝゐまゝゝ樂ど。旅宿ゐ留りて母親ゐ圖書がいひ〳〵ゝゐ告。
その系ゐを拒ゝゐ。恕ゐ信なれ人を憑んとて故ゐを立去り遠れ縣く
ゝゐつゐ。今更悔〳〵ゐ人ども。又阿容〳〵とゐる羽の湊ゐ留れど。進退
ゝゐに究まれども。泰平の世の辱さハ。何ゐまれ生活して母ほゐ養ハ
なゐべ。ゝゐあちゐて世〳〵ゐとかひ〳〵〳〵慰れば。大稲妻て嘆
息し。世の人の心ゐ。憑れぬゐのハゐし。彼金刺ぬ〳〵ゐ父の蔭ゐ
りて。獲ゐれ書籍ゐ借て閲し。ゐんゐ父が父の荒土ゐ獲て。家と成し
今更ゐ發跡て。武夫の員ゐ入ゐ。恩ゐ忘れ盟ゐ背れかくまで强面へ
ゝゐゐ。ゝゐハめれど。彼内政鞍刀稱を心ざゐ滅ゐ〳〵。ゝゐ〳〵吟刺
婦人ゐり。今ゝそめれ侵ゐハ心良人と諫めゐ。ゐん父が杖とも程ゐも。

るのなるふぶやいとれゃで費せ一盤纏の外ゐ。ゐ尾四五貫の銭ゆるて。
ゆゝや今茲いこの処ゐ親子徒然ゐ暮ゐも。生賃宿の心易さへ。
きてゆりねべゝ。金剌殿のゐひゝて。ほびゐ。ゐ紙待めくて。後ゐで
を。ゐひ丹。母ゐ流石ゐ母ゐりと。司之郎ハ感激して旅宿ゐのゐこと
三十日にあまれども。圖書が使といふ人も来ぞ。ゐゐ右樂まゐば。
金澤文庫のほとりにゆ。毎日に築垣のゐのゐに立在彼所ゐ
集合ふ学徒ゐ。読書講書の声を笑て僅ゐ憂とかゐ遣のゐ又せん
術もゐりけり。比も秋の季なれば樹くの楓も色ゐほてづれ。せゐど
虫も鳴。夜ハ蒲団旅客の。つゞ寂ゐゐの秋ゐやめゝん。ゐ悲さと忘れん
とて。けゐも又司之郎ハ文庫のほとりに赴て。日も西へ傾けば母の
待然ゐや在んとて遽しく宿ゐ帰ゐ。ゐも金剌が茅宅の背ゐゐ。

ゐてゐゐとゐゐゐれば。彼処ハ圖書が後庭とおぼしくて。紫色まゐらゐ
引続らして東ゐ向ひゐる衡門あり。これを裏ゐ潰されゐ。色の透より
長ゐる菊花。色濃き楓樹ゐどゐゐゐ。これをゐゐりゐゐ折も
めれ金剌が女児十六夜ハ。菊の花を摘せんとて。腰ゐ。ゐ尾ゐ弱竹
ゐりを打て。漫ゐ庭へ出ゐるが。弱竹ハいちゐ。色の透より。司之郎が
外面ゐ。ゐるとゐて忙しく主の袂ゐ掖て彼廻せ彼処へゆく壮佼ハ云号の
刀祢ゐゐとゐ。とゐ人が忽地十三夜ハ。顔ゐ紅ゐゐ庭の隈。ゐんゐゐゐ
嘆息し。十二の歳ゐ別れしより。ゐりつけ髪も肩ゐて迄ゐ身丈ゐれど。
ゐゐゐ見ゐゐゐ。ゐゐ近ゐゐゐゐ。ゐゐゐ。
家翁の大人の幼ゐゐゐて再び呼ひも追へゐゐ。ゐとも貪しくゐゐせば
ゐゐ。ゐゐゐゐゐて寝れのひね。ゐゐゐて。ゐゐゐゐゐゐ。

籬笆を
隔て
十六夜
司三郎が
あやまちつるこの
ものいふ

いさとり

密語する。されば又司二郎も。彼処の庭より闕窺うに。十六夜なるべ
ものうらぶひよるべうもあらざれば。迷ふ目と見て注せしのち。次の日
文庫のほとりに折び暮ふして。きのふうもいと遅く。おろず途とて
行ふ弱竹ハ色のほとりふ立在て。その久さを行くさう。間ちうくなる
まうにとやくくとつぶやけられて。司二郎ハ恥しげよ左右をえうてあるこ
とれば。十六夜ハ忽地ふ色の透よう半面を見して。司二郎をうちえつて。
莞爾と笑う容止ハ。仙嵐の桃花旬ひとぶれて人間よ薫るが如く。宮闕の
紅霧ふ溝よ流まて。為ふ情をよるるふ似うう。迷ふをあるこそうのこも
ゐるいうど。且して司二郎ぶうふ。別れなりてうう。雁の翼ふも。安否知
間はしまりしふ。悲ふくをるるふ。故ぶふ堪ういある比。家ふるの大人
めいえ来したれどうぶ。寡くしれを。嬢うせるふ乱ふと。惜して。再びを訪

ふ。今何ふのいて。護新も拒くふ。十六夜甚て宣ふ如く
うう父の公はよくて。おん身がうくをうふふ任せどこのをを憑こもぶせばこそ。
遥くと来まして。ふ旅宿の憂苦も痛しうれど又せん術も侍ふねば。間もし
間れもせんるの。なほ今ぶ侍れども。豆のほどを人目ををうう。今宵更
闌て潜びく来ませ必待をるふこそ。とうふ行ふ人の来る音したり
うれば。十六夜主従ハ裡ふ入り。司二郎も凜しく色のほとりを立り退て。
ぶて旅宿へうりつ。元来戈高く学業熟せ。司二郎ふれども青年二十ふ
足ふざれば。えぶうら欲ぶ滅ることかうるうど。十六夜がいひけるふ。只耳底ふ
うぶうて魂漫よ浮れ出つ。ぶめんとをれふ汎止ふど。その夜さり母親ハ
熟睡さるとうて旅宿と潜び出件の色のほとりふ面てて。ねとくとうち
敢けハ弱竹裏より衡門ぶ半開きて。司二郎ぶ裡ふ入る。密ふ十六夜が

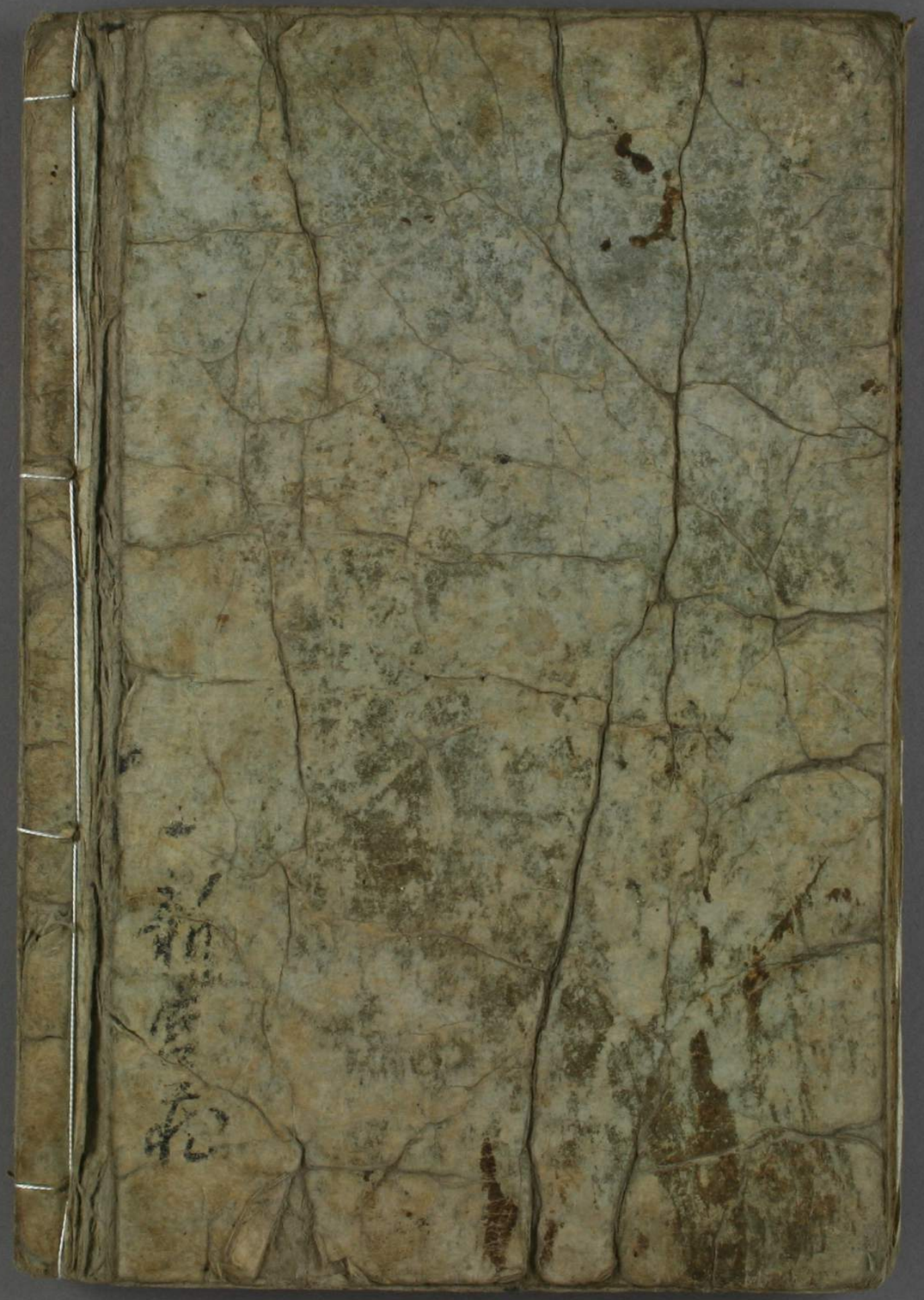
便室に誘引つゝ。此ハ主人夫婦が臥房へ遠て間遠なれバ。足を忍ばせ
絶てなし。當下十六夜ハ司之郎が来つるとみて席を譲りて上座に居らし
さて云けり。おん身とわらはゝ過世より神の結る縁しなりけん。中ね前
より親と親が折合を立く云号物のごとくなる比より。彼ハ汝が夫なり。汝ハ
彼人の妻くと。いひ悔らるゝ毎もそれなりけりに立てられ。又あふよしハ
元来のようとハきれど途遠く。思ひ細りて心さへ彼方に侍りしに。今ハとり
なく続めふ欲しさを精しまず。人云ハいく人参りて何解ぞ親の免許を
得るもあれバ。思ふのまゝそのみ共に。一日も處りがたし。心が遣て学問し
給ひよくだみ読ぬのだ。さて父忽地思ひなしておん身が嫁ひとりまもなる
までこそハ。いかでか他人に見え侍らじと。かくの時節が待
身の人と叮嚀に慰むる誠心言葉にあふれて。司之郎をこれにまして坐り

感涙を拭ひあへず。忍ぶる中ハ情を心操よしや夫婦となる日ハなくとも
恨みハいはじ。元来不肖の吾儕なれども。経傳雑史に眼を晒して螢
聚雪を積若学ながく年を経て七歳の昔より十八歳のけふに至れど。
才鈍けれバいまだあらされあるときハ孫子呉子京家の八流大江の秘録。
和漢の兵書の紐を解て治乱成敗の理義を考。又あるときハ諸家の
舊記を渉猟して律令職原のふるきを温ね。有用の人となりて家を
起さんと思へども。いまだ伯楽にあはざれバ。恨とハ思ふものゝ今宵再
會して心操を守とハ世にこれをなるものハ只おん身のこゝろざしを夫のこゝろとめ
少女とならるゝそのたゞの富と貧ハ夫の衣食美と悪とがあげはゝらひて
ただ二ツなく契りしもその人寠しくなりはてゝとれバ。それよりかくも縁を
関ん居て。かんぐならるものなしあり。おん身とともに。いまだ臥房を共せ

せて。総角のこゝをも別れて駿の手を引るゝ。富貴にしゝく貧賤の
夫を嫌ひ。親の結び〳〵嘯夫の縁成。ふゝびこゝに待びそえて信ゆ
慰〳〵ふ。その一言ゝそゝぶゆゑ千金あそのゝとて。歩ゆ感激する行ふ
弱竹ハ黒棚ゆる。梅酒の壺をとりて准侯の殺ひとゝふゝとりをえつ
盃を勧ふゆゑ。司之郎三度傾けて十六夜を指〳〵て奥園ゆ及ぶまに。
司之郎ハ只管ゆ心動きて。宵十六夜と挑成せつゆゆゑんとゆりの亂ゝ
なれを十六夜ハ左〳〵も猜〳〵て形を改めつゝ夫ゆ對ひかく酒ゆ招き
ちゆるゝら。既ゝ親を侮るの罪付り況く以房と共ゆ世べゆゑ其責成
脱るべき。ゆゑれども。ゆりゆゑんあるゆ早し。今ゝゝびゆせとゝゆゝ夫を
恥てこれを強ゆゑ。とゝかくゝゝる行ふ十六夜ハ元来酒を嗜ざゝふ。奥ゝゆ
果〳〵てゝるゝたれゝ〳〵醉て。席ゆ堪ずゆめゝ久。辞せどて即房ゆ

入り。横ゝ被きてゝ卧ゝりける。さる行ふ夜ハいとく深て丑三比ゝゝ
ゝび。司三郎ハ。十六夜ゆ醒ゝゆゝゝとゝゝを弱竹叮嚀ゆこれを
ゝゝ兄只今ゆりゆゝゆゆ路の程も久りゝゝ彼君の醒ゆゆて狂て
まちゆゝとゝゝゆ公ゝゝて行ゝ。ゝかゝゝゆ焼ゆゝち對ひけり。十六夜ゆ
醒ゝゝ紛ゝゝふ。夜ハいとく深〳〵ゝゝゆ笛〳〵ゆ弱竹も堪ずゆ
ゆりけん臥房ゆ入りゝ。秋の夜ゆの肌ゝ。司之郎を殭ゆ少やゆゝ。
鄰房ゆ入りてゝれゆ此五珠ゆゆ寝座ゆて巳屏風の雀形動く久ゝ
りゝ共ゆ推ゆて裡ゆ入り。ゆゝ假寝の横の裾ゆゆ〳〵夜寒ゆ凄く
ゆゝ。十六夜これゆ驚きれて忽地ゝゝられゝも夫の衣ゆ落きゝゆゝ。
公ゝゝゝ近ゝゆゝ。これを嫦夫のゝゝゆゝゝゝゝゝゝゝ結ん
けん。天ゝゝなせる奇縁ゆゝゝ。さる行ふ時刻ゝゝて。鶏鳴曉を告ゆ

けれハ司三郎ハ遽しく起出くかくらんとしたりしが十六夜ハ代昌の
幷と白銀の指環なとうり出て。これハ司三郎ハ贈りつゝいまの年ハ旅
ゝとれば。よろゝの費と助け進ゝとべうやゝめのうら。親よ親ゝ分ハ
ゝ任せと。数ゝめゝふね物ゝれど見事の引出物ともこれなしねゝ
ゝし送せゝの付れば。今宵も潜びく来させしゝ有るよゝとゝいふ。
司三郎ハその贈物紙受もさめて。潜ゝふね志紙飛びゝ考え明るべく
ちゝれゝんとて。ゝこの夜を契りゝ恋情にてゝゝれ去りしがとれゝう
毎夜ハ密めゝる。十日ばかりハなりゝ。ゝゝれども。彼弱竹が嫉妬の間
圖をゝゝるべく絶えゝこのゝ紙人ハあゝふせど。この疑惑を主人宗刺が。
伊勢の鳥羽より。親ゝりゝ共わてすゝゝし。老僕繁雨が女兒
あて今茲ハ九八歳ゝりゝ。眉月ゝゝ嬋くゝ。ゝ十四の

春より十六夜ハ護册れてゝゝ。ゝゝ刺ゝる女の子なれば十六夜ハ
ゝゝゝもゝて憑ゝれりのゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ故ありけん。
との両三夜ゝ司三郎が来ることなゝれば。主従併ハ有りし惑ひ法。
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。胸くるくゝ思ひゝゝ。人伝ゝ聞はしもなく。
只いゝゝゝゝ弱竹ゝ衛門のゝゝゝゝゝゝ立ゝゝゝゝ既ハ七夜ゝ及び
ゝゝゝとゝ。

書紙藤編摸稜案巻之一終